

Title	人工股関節患者のQuality of lifeに関する質的研究と継続的調査研究
Author(s)	藤原, 君支
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/46238
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

氏名	藤田君支
博士の専攻分野の名称	博士(看護学)
学位記番号	第 20197 号
学位授与年月日	平成 18 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 医学系研究科保健学専攻
学位論文名	人工股関節患者の Quality of life に関する質的研究と継続的調査研究
論文審査委員	(主査) 教授 牧本 清子 (副査) 教授 奥宮 暁子 教授 小笠原知枝

論文内容の要旨

人工股関節置換術 (Total Hip Arthroplasty ; THA) は、変形性股関節症などで関節破壊が進んだ患者に行われ、術後は身体症状を改善する反面、脱臼や耐久性、感染等の問題を有する。THA 患者を対象に、SF-36 等の QOL 尺度を用い術後の ADL や疼痛改善が多数報告されているが、患者の心理面や社会面を含めた多面的な Quality of life (QOL) の変化は明らかにされていない。本研究では、THA 患者の QOL に関して質的調査と量的縦断調査を行った。QOL は一般には生活に関する主観的な満足や幸福感と定義されるが、本研究では健康や病気によって影響される側面を扱う健康関連 QOL について報告する。

質的調査では、THA を受けた患者が、病気を持ち生活する体験をどのようにとらえているか、手術前後の生活体験のプロセスを通して明らかにすることを目的とする。術後患者に手術前後での生活体験について半構成的面接調査を行った。研究参加者は片側 THA を受けた 20 名で、術前は慢性的な股関節痛と歩行障害による身体的制約だけでなく、歩容悪化による劣等感をもっていた。術後は身体症状の改善に喜びが大きい一方で、徐々に人工関節の限界を感じ、障害と折り合いをつけた生活へと移行する過程が示された。本質的調査の結果は、量的研究では明らかにできないもので、身体的機能評価中心の THA 患者の QOL に関して、多面的な評価の重要性を示唆している。また、術前・術後の心理的なサポートや術後経過に即した患者指導の必要性が明らかになった。

さらに、欧米で THA 患者の QOL 研究に多用されている Western Ontario and McMaster Universities Osteoarthritis Index (WOMAC) 日本語版の信頼性妥当性について検討した。WOMAC は自記式の骨関節疾患に特異的な QOL 尺度で、日本人患者を対象とした場合の文化的適合性を検証した。THA 術後患者 220 名を対象として検討した結果、痛み項目で床効果があったが、項目全体としての信頼性妥当性はともに高く、今後の日本人 THA 患者の研究に十分使用できることが示された。構成妥当性については、WOMAC 原版との尺度構造の違いがあったが、日本人のライフスタイルや THA 患者の身体機能の特性の影響が考えられた。対象者が術後患者のみであったため結果に限界があるものの、骨関節疾患に特異的な QOL 指標として有用であると考えられる。

上記の調査結果を統合し、健康関連 QOL 尺度の WOMAC と EuroQOL (EQ5D) を用い、THA 術前と退院後 1 か月、術後 6 か月で縦断的な変化を調査した。さらに和式のライフスタイルとの関連を検討した。分析対象者は 203 名で、平均年齢は 61 歳だった。WOMAC の痛み・こわばり・身体機能の全下位項目と EQ5D の不安や活動など全項目において、術前より術後の方が有意に改善していた。しかし、床座などの股関節深屈曲動作が術後も困難で、QOL

に影響していることが示された。日本人の QOL 評価には WOMAC などの西洋式の尺度だけでなく、正座やしゃがむなどの日本特有の生活動作も評価指標に含めることが必要である。

論文審査の結果の要旨

藤田君支の博士學位論文では、人工股関節 (THA) 患者を対象に質的調査により手術前後の患者自身がとらえる生活体験を詳細に分析し、質的調査で同定された課題を組み込んだ量的縦断調査を実施した。本研究は、質的調査の結果に基づく量的調査であるため、その結果を多数例で検証できること、既存の健康関連 QOL 尺度では測定できない日本人 THA 患者の問題を明らかにできることが特色である。

質的分析の結果、術前は身体症状だけでなく、跛行による劣等感を持ち、術後は機能改善に喜びが大きい、徐々に人工関節の限界を受け入れていることが示された。質的調査で同定された課題と信頼性・妥当性を検証した骨関節疾患特異的尺度 WOMAC (Western Ontario McMaster Universities Osteoarthritis Index) を用いて THA 患者の QOL を術前、退院後 1 か月、術後 6 か月で縦断的に調査した結果、術前に比べ術後は疼痛や日常生活動作など身体機能面の改善が著明で、心理・社会面の改善もみられた。一方で、股関節深屈曲動作で脱臼するため、床座や正座など和式ライフスタイルにおける生活動作では困難があることも示された。和式の生活をする日本人の QOL 評価には西洋式の QOL 尺度だけでなく、正座などの伝統的な生活動作も評価指標に含めることが必要である。

本研究は、従来の QOL 調査で不足していた患者の生活課題や心理面の問題を同定し、多数例の THA 患者における手術前後の QOL 変化を検証した国内で初めての研究である。藤田は、手術や治療手順が標準化し、多数の THA を行う施設において、治療手順の違いによるバイアスがかからない患者の QOL を把握した。質的調査と量的調査の両手法の特性を活かし、身体機能評価で捉えられがちな QOL 評価でなく、個別の生活背景や社会的役割による生活状況の相違と和式ライフスタイルでの困難さを明らかにした。欧米の生活様式主体の人工関節をもつ日本人患者の生活課題が示されたため、THA の術前指導や術後の患者教育に活用できるだけでなく、和式の生活に対応できる人工関節の開発に向けた基礎データとなり得る。さらに、本研究の結果は、国内患者だけでなく、床座のライフスタイルが多いアジアの股関節症患者の看護支援にも応用可能である。

よって、この博士論文は大阪大学博士 (看護学) の学位授与に値する。